

講演・パネルディスカッション

It Takes a Village. “村じゅう みんなで” ～よそのボコも うちのボコ おらが村をこせえるじゃん～

講師・アドバイザー

荒牧 重人

山梨学院大学法学部教授

講師・アドバイザー

津富 宏

静岡県立大学国際関係学部教授

コーディネーター

芦澤 郁哉

NPO法人bond place理事

発表者

加藤 魁人

山梨県立大学2年生

発表者

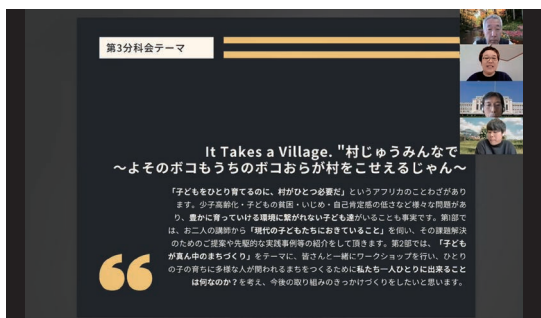
久保田 優羽

山梨英和大学4年生

発表者

清水 そら

山梨大学3年生

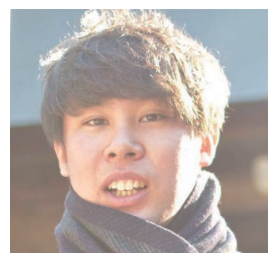


【第1部】

▼**芦澤:**第3分科会「子どもの教育・子どもの貧困」を始めさせていただきます。私は司会進行を務めさせていただきます、第3分科会運営メンバーの芦澤郁哉と申します。本日は11時30分までの90分間の分科会になりますので、皆さまよろしくお願ひいたします。今、オープニングで本日の進め方を確認させていただき、その後、第3分科会の趣旨の説明や、皆さんと一緒に今日考えたいこととお話しさせていただきます。その後、ご講演をお二人にいただきます。

まず、一人目は山梨学院大学の荒牧さん。「子どもの権利と子どもにやさしいまち・コミュニティづくり」というテーマでお話しいただきます。その後、静岡県立大学の津富さんから、「困りごとから始めよう」ということで、お二人にご講演をいただいた後に、参加者の皆さんからチャットでご質問をお受けするという予定です。分科会のお話を聞きながら、疑問に思ったことや、大事ななと思ったことなど、チャットのほうに書き込んでいただければと思います。次に、第3分科会の趣旨説明と本日皆さんと一緒に考えたいことということで、第3分科会の運営メンバーであります副リーダーの福田さんよりお話しさせていただきます。福田さんよろしいでしょうか。

▼**福田:**はじめまして、山梨YMCAの福田と申します。第3分科会で副リーダーをしています。この第3分科会は、「子どもの教育・子どもの貧困」をテーマに、子どもたちに関するさまざまな民間の団体の人たちと準備を進めて参りました。その中で、私たちが大事にしたいこととして、アフリカのことわざ「子どもをひとり育てるのに、村がひとつ必要だ」があります。この古い言葉に感銘を受け、そのコンセプトで私たちは子どもたちと育ち合うようなコミュニティづくりはどのようにしたらいいのだろう、そんなまちづくりができたらいいいね、という話になりました。特別に子どもたちを支援の対象として取り扱うというよりも、魚屋さんとか、近所のおばさんとか、いろいろな関わりの中で一人の子どもを共同体で育て合う、子どもを育てることで村も育っていくような関わりを作れるまちづくり、そして、子どもたちの関わりを作り、そのため



の思いを皆さんと分かち合う、そのような場にして、一緒に自分たちの言葉を語り合うことを大事にしたワークショップ、分科会にしていきたいと思っています。

タイトルは「It Take a Village. “村じゅうみんなで”」という先ほどのことわざ、そして、「よそのボコもうちのボコ おらが村をこせえるじゃん」というのは山梨の話言葉、甲州弁です。ボコというのは子どもという意味です。よその子どもも自分の子どもも同じ、皆で子どもたちを育てよう。そして村をつくっていく、コミュニティを育てることになる。皆さん自身が、自分の言葉で子どもの育ちや、まちづくりということを語り合える場にしたいと思っています。どうぞよろしくをお願いします。

▼**芦澤**:ありがとうございます。本来なら全国から皆さんに集まっていただいて、子どもというものを中心に考えて、それぞれの立場の人が、どのように関わられるのか、皆さんとお話できることを本当に楽しみにしていたのですが、このようなオンラインという形になってしまったので、もしかしたら、皆さん同士で交流するとか、話をするのは少し限定的になるかもしれませんが、オンラインだから参加できたという方もいらっしゃると思いますので、このご縁を今後につなげたいと思います。それでは次に進めさせていただいて、ここからは山梨学院大学の荒牧さんからご講演をいただきます。

▼**荒牧**:改めましてこんにちは。荒牧重人と申します。日本女性会議でこのような報告ができることを光栄に思います。私の話は、理念的な話を中心になることをお詫びします。具体的な取り組みは、次の津富先生にお譲りします。私の話は大きく分けて2つ。1つ目は子どもにやさしいまち・コミュニティづくり。2つ目には、その際、基本に置かれるべき子どもの権利ということでもあります。現代の子どもたちに起きていることというよりも、その課題のために模索していることを主に話します。



この話の前提となりますが、1番目は、日本の子育ての伝統というのは、地域コミュニティで子どもを育てることです。その家の子どもということではなくて、地域コミュニティで子どもを見守り、関わり、育てることが、長い間の伝統でした。前提の2番目は、子育て支援は、子ども支援につながらないと効果があるとは言えないということです。よく「子どもは未来の担い手」と言われますが、「今を生きる主体」でもあります。また「子どもは社会の宝」とも言われます。そのとおりですが、「子どもは社会の一員・構成員」です。それにふさわしい地位や役割があるのかということが問われています。もう一度言いますが、子育て支援は、子ども支援と両輪で取り組む必要があるということです。それから前提の3番目として、子育て支援が進んでいる国や地域は、子育て支援策そのものだけではなく、女性の地位や権利、子どもや若者の意見表明参加に取り組んでいるということです。前提の4番目として、私たちは地方自治や、国際的につながる子どもの権利、国際標準である国連の子どもの権利条約、さらに子どもの権利を実現するしくみや制度、内容や理念だけではなく、そのための制度やしくみの構築、それから連携・協働などを大切にしてきました。前提の5番目として、今話題になっている「こども庁」設置の議論でも、総合的な子どもの権利を保障する子ども基本法というのが必要で、自治体が総合的な子ども条例を作る意味でもあります。

話の柱の1つ目が、子ども問題というのは子どもの権利や視点、方法で考え取り組むことの必要性であります。このことは国際的には当たり前のことです。申し遅れましたが、ここで言う子どもの権利は、荒牧の学説とか、芦澤さんの見解ではなく、国連が全会一致で採択をした「子どもの権利条約」の趣旨や規定をもとにするということです。

ここでは、子どもの権利を強調する意味として、4つ述べたいと思います。

1つ目は、そもそも論で、子どもも独立した人格と尊厳を持つ権利の享有・行使の主体であることです。自己肯定感というのがこの権利の享有・行使の前提となるものです。

2つ目は、育てる・育てられる、教える・教えられるという関係を、一方的な関係にしないということです。

3つ目は、子どもの権利だけが保障されることは基本的にありません。これが子どもの権利の特徴でもあります。子どもの権利と子どもを支援する側の権利の両方が保障される必要があるということです。

4つ目は、縦割り行政とよく言われます。世代割りというのも私が流行らせようとしていますが、あまり流行りませんでした。生まれる前後は医療や保険で、生まれてからは児童福祉、学齢期は教育行政で、それから外れたり学齢期以降は青少年対策というような、世代割りになっている行政の問題点を克服して、総合的・継続的・重層的に施策を考えていく上でも、子どもの権利は重要であります。

もう1つ、子どもの権利から子どもを捉えてみると、次の3つがよく言われます。子どもは一人の人間である、子どもは子どもである、子どもは社会の一員・構成員であるということです。子どもが一人の人間であることを基本として、トータルに子どもを捉えることが必要になっていると思います。子どもは単に対象ではなくて、自らの人生の主人公であり、問題解決の主体であります。単なる対象から、自ら選びながら成長していく主体として、支援していくことが重要です。国連の子どもの権利委員会も言っていますが、乳幼児もその権利の享有・行使の主体であります。先程、子どもの権利をめぐる主張されることとその問題点をお話ししましたが、子どもの権利というのは命の権利で、そして成長・発達に関わる権利があるということ。命とい

うものが大切であることは、けっこう強調されますが、その命の権利がある。その権利というのは、皆持っているものなので相互に尊重する。そしてこの議論は、感情論でもなく抽象論でもなく、具体的な場面であることが大切であると実感しています。誤解を恐れずに言えば、子どもの権利を尊重・大切にしようとする人と、否定的な人の分かれ道は、究極的には子どもが持っている力を信頼しているかどうかということです。

柱の2つ目、子どもにやさしいまち・コミュニティづくりということに入ります。この基本的な考え方は、子どもがダメ、親・家庭がダメ、保育士・園がダメ、教職員・学校がダメ、地域がダメという「ダメダメ論」ではなく、「ダメダメ論」は私たち研究者が得意とすることですが、その視点や対応を越えて、子どもがともに育つまち・コミュニティ、子どもとともに育つまち・コミュニティづくりが必要です。この分科会のテーマでありますように、子どもの育ちを村じゅう皆で支えるということが重要になっていると思います。このことは昔に戻れということを主張しているわけではありません。柱の1つ目で述べたように、子どもを独立した人格と尊厳を持つ権利の主体であることを前提にして、まち・コミュニティで子どもの育ちを支える、という新しい形態であるということです。

早めに言っておきますが、子どもにやさしいまちというのは、全ての人にやさしいまち・コミュニティであるということです。これは障がいがある人の生きやすい・住みやすいまちというものを考えてみれば、すぐに分かることだと思います。ユニセフが、子どものやさしいまちというのを主導しています。私たちはユニセフよりも先に取り組んでいたのですが、日本においてユニセフの評判が圧倒的に良いので、ユニセフを利用して、ユニセフも言っているというようにしています。「子どもにやさしいまち・コミュニティ」の定義は、子どもの権利条約を実現している、実現しようとするまち・コミュニティであります。

ここでは、「子どもにやさしいまち・コミュニティ」づくりの基本戦略を少し説明したいと思います。

1番目は、子どもにやさしい枠組みを整備するということです。このことは、「子ども条例」を制定・実施するということにつながります。先ほども言いましたが、国レベルでは子どもの権利を尊重する総合的な基本法が制定されていません。したがって、総合的な子ども計画も策定されていませんし、子どもの政策を調整する部署も無いといえます。山梨県では、甲府市が「子どもの未来応援条例」という総合的な子どもの権利を尊重する条例を作っています。県レベルでは、議員立法で今、「子ども条例」を作成しようとしています。

2番目は、意識啓発です。このことで重要なのは、子どもが本来持っている権利を子どもに伝えること、もちろん子どもだけでなく大人も知ることが重要ですが、子どもに伝えることが肝要であります。条約では42条に独立した条文中で、子どもと大人双方に条約の趣旨や規定を周知させることを求めています。また日本では、学校カリキュラムに子どもの権利や条約を盛り込むことを、国連・子どもの権利委員会は日本国に勧告をしています。

3番目は、総合的・戦略的な計画を立てるということです。自治体では基本計画、マスタープラン、次世代の計画、子ども・子育て計画、教育計画、いじめ防止の方針など多数あります。しかし、子どもの権利ということがどれだけそれらの中に位置づけられているかを問うことが重要です。一部の自治体では子どもの権利を中心として、若者施策に通じるような、子ども・若者計画を立てている自治体もあります。

4番目は、子どものために十分な予算の確保ということです。子どもの育ちや子育てにはお金がかかります。それにふさわしい予算になっているかということ。そのためには、子ども関係の予算をより見える化していくことが必要です。

5番目は、庁内の調整会議とか、子ども施策を中心に担う部署が必要です。これは単なる名称変更ではなく、実質的にどこまで総合化できているかということが重要です。特にこの分科会で言えば、教育分野というのは取り込めていません。

6番目は、子どもにやさしいまち・コミュニティづくりの中心的な課題である、子ども参加ということです。この子ども参加も、制度を作っていくということと、決定に参加をする過程が重要であると思います。子どもの声に私たちはどこまで耳を傾けているかということ、もっと言うと、子どもをあてにしてともに作り上げているか、子どもを対象にしていらないか、ということがあります。子どもの意思・意向を確かめるためには時間もかかりますし、信頼関係も重要であることを付け加えておきます。このポイントは、まず子どもの参加は権利であるという認識や位置づけが必要です。皆さんのように、物分かりが良い大人であれば、子どもの意見・思いを聞くということができそうですが、大人の視点でおとなの都合の良い時に聞けば良いということではなくて、子どもの権利であるということです。この権利であるということだけでは不十分で、子ども自身が伝えることができる制度やしくみが必要であるということです。皆さんの自治体では子ども自身が、例えば児童館とか児童センターに申し込むことができるか、子どもがその運営に参加するようにしているかどうか問われます。また、今どきの子どもは時間がありませんので、参加の支援や時間の保障、場とか人の関わりなどが肝心です。また、子どもの意見表明・参加によって、どこまでエンパワーメントをしたかを確認することが大事です。従来では、一番参加した子どもが「やっぱりこのことができなかった」と言います。しかし、はたから見るとしっかりエンパワーメントしている。そのことを子どもに伝えるということが重要です。また、個別の状況・必要に応じた参加支援をすることも重要です。それから、さまざまなレベルでの、子どもの意見表明・参加

の取り組みを連携することが必要です。

時間も限られていますので、最後に、データ・エビデンスの収集ということの重要性を強調しておきたいと思います。現状でも、子どもたちの現実というものはしっかり把握している場面がありますが、それは行政部署とか関係施設などで留まっている可能性があります。市民との連携・協働を行うには、個人情報やプライバシーの保護に十分に考慮しながら共有することが重要です。また、子どものために独立した権利救済・擁護活動の必要性を、ユニセフは強調していました。このことは地方自治法では不十分なので、条例ということで自治体の法に規定する必要があります。

まとめとして、2つのことを申し上げたいと思います。1つ目は今注目されている、子どもの育ち・子どもの支援ということの取り組みの多くは、目の前の子どもの生きること自体に向き合うということです。「生きる」ということが、その子どもの安心とか、条約のキーワードでもあり、子どもの問題に取り組む時の観点でもあります。子どもの最善の利益を、一つひとつ考えて応えていくと、連携・協働が不可欠になります。2つ目として、子どもの権利を実現している活動・取り組みが多様に存在しています。これまでの取り組み・活動の成果を確認して、共有することが大切であることを述べて、私の話を終わります。ありがとうございました。

▼**芦澤:**ありがとうございました。30分という短い時間の中で大切なことを伝えていただきました。それではこのまま静岡県立大学の津富さんにご講演いただきます。

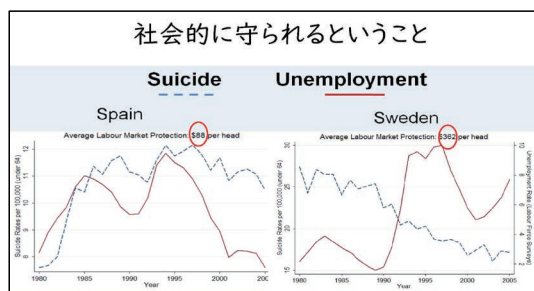
▼**津富:**静岡県立大学の津富です。よろしくお願いします。学生との活動や、地元静岡の皆さんと活動した話を織り交ぜながら、皆がつながって困ったことの解決ができるだけでなく、皆の関係性が変化するといいな、というお話をさせていただきます。私の自己紹介ですが、少年院で法務教官として19年働いてから、静岡県立大学に移ってきました。社会活動として市民の皆さんと行っている青少年就労支援ネットワーク静岡と、学生と一緒にやっている静岡学習支援ネットワークがあります。後者は、もとは中学生の学習支援をするサークルで、私がサークルの顧問をしていたのでそのまま代表理事になりました。



最近思っていることですが、困りごとから始めようという時にはいろいろな解決の方法があると思います。専門家を呼んで解決しようという方法もありますが、あるいは大きなしくみ、国などに関与してもらい解いてもらうなど、いろいろな解き方があると思います。もちろん、国には国の責任がありますし、それを投げ出したほうがいいと言っているわけではありませんが、相互扶助についてはすごい興味があって、ここ10年くらい自分自身が皆さんとやってきたと思っています。

少し大きな背景の話をするすと、グローバリゼーションとかグローバリズムなどと言ったりしますが、例えばリーマンショックはグローバルな現象ですが、そのあと日本でも景気が悪くなり、荒れた10年が始まり、EUヨーロッパ諸国も大変なことになりました。『THE BODY ECONOMIC』という本があり、それが翻訳されて『経済政策で人は死ぬか?』という本になっていますが、リーマンショックのあとの緊縮政策の結果、医療費を抑制した国々がヨーロッパにはたくさんあり、とりわけ国の財政が破綻に陥ったギリシャとかスペインなどの南欧の国がそうだったのですが、実際に経済政策を変更することによって、さまざまな疾患により死亡率が上がったということを示している本です。だから経済政策で人は亡くなってしまおうという話で、コロナ禍はまさにその典型で、日本でも保健所を緊縮政策で閉めてしまったことが問題となり、多くの方が指摘しています。

一つの例ですが、2つグラフがありますが、左はスペイン、右はスウェーデンです。スペインは非常に緊縮政策で打撃を受けた国です。スウェーデンはご存じのとおり、いまだに福祉国家を保っている国です。青い点線は自殺で、赤い線は失業です。スペインは青い線と赤い線が連動していることが分かりますが、人が仕事を失うと、社会保障が無いので自殺して亡くなる方が増えるということです。スウェーデンは無関係ですね。そもそも最低賃金が全く違います。赤丸ですが、左は88ドル、右は362ドルです。結局、人の命は何によって決まっているかという、このようなマクロな経済政策、あるいは社会保障・福祉政策といった福祉に、人の命が関わってしまっていることを示したものです。これ自体が直ちに相互扶助の話ではありません。私が気にしているのは、各国によって状況は違いますが、このグローバリゼーションの中で私たちが生き延びていくためには何が必要かということです。国家施策も必要ですが、ひとまず生き延びるためには何ができるのかということです。先ほど申し上げた話で、ギリシャは、結局ドイツの銀行にお金を借りていたために、破綻させられてしまいました。近くの韓国ではIMFの改革が入ってやられてしまったわけですが、まったく同じことがリーマンショックでギリシャに起きたわけですが、ギリシャでは国内総生産が劇的に減り、インフラで民営化されました。なお、日本でも私たちの静岡県では、浜松市の水道民営化が社会的な問題となっています。



しかし、ここで重要なのは、ギリシャでは生き延びるために、さまざまな相互扶助のしくみが立ち上がっていったということです。国家施策に大きな欠陥があったとしても、あるいはグローバルな経済に欠陥があったとしても、生き延びるためのさまざまなしくみを作り出していき、その力が私たちには備わっているということです。スコロスというのはアテネの団体ですが、彼らは、「私たちは自分たちが費やした力が失われることを決して嘆いたりしません、連帯社会そして協力を信じているからです」と言っています。今日は、大きな話から入っていますが、グローバリズムは、日本も含めて世界全体を覆っていますが、それに対して何らかの取り組みをしようとしている仲間は世界各地にいます。そこから私たちは学ぶことができます。

さて、今回も大学生に発表いただきますが、さまざまなことが私たちの身近でも起こっています。一つは「たべものカフェ」です。私がやりましようと言ったのは事実ですが、実際運営しているのは学生ボランティアセンターという、昨年度から始まった団体です。ただし、この活動は大学から好意的に受け止められていません。持続可能性の問題や子どもの貧困の問題はもともとあったものが、このコロナ禍でさらに深刻な形で現れてきたものです、コロナが無くなったからもう大丈夫というものではないと思っています。そこで、今回明らかになってきた学生の困難を解こう、という学生団体も始まりました。この「学生助けたいんじゃー」は、現在8名で行っています。

もう一つ別の取り組みで、これはもっと緩やかなものですが、何か困りごとがあったら発信して、助けてねというやりとりができる「たよりジョーズたよられジョーズ」というLINE(ライン)グループです。困りごとはさまざまですが、コロナ禍での孤立化という問題が大きいので、一緒にごはんを食べたいとか、一緒に散歩したいとか、いろいろあります。先輩や後輩、学部を超えて、いろいろな人が入っています。履修の仕方が分からないとかもあります。オンライン(Zoom)でミーティング・雑談会を行って、親睦を深めながら簡単に、頼れる・頼られる関係を作っています。私も一緒に行ったのですが、スペインで目にした時間銀行がもとになっています。時間銀行というのは日本にもアメリカにもありますが、スペインの時間銀行に学んだ4年生の学生たちが中心になって作りました。

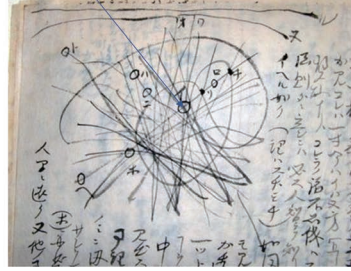
このようなことをやりながら私自身が大切にしていることは、まず一つは運営チームを作ることです。核が無いとなかなかこういう活動は続かないと思います。それから意義を理解することです。「たよりジョーズたよられジョーズ」は、もともと時間銀行からきたものです。時間銀行とは何かというと、お金ではなく時間をやり取りするものです。やり取りする時、人のためにお互いの時間を使い合うというコンセプトが大事だということです。やっている人が楽しいか、自己組織化していけるか、徐々に広がっていけるかということです。そんなことを大切にさまざまな活動をしています。

今日は村をつくっていくというテーマですが、すでに村はなくなっているというのが私の認識です。私たち一人ひとは社会的に孤立していますから、新たに自分たちが作り上げていく、自分たち自身が動かす自分たちのためのコミュニティを作っていくことになります。本日のテーマはそういう意味だと理解しています。

そこで、私の社会活動の一つである、青少年就労支援ネットワーク静岡の活動を困りごとから始めようという観点からご紹介いたします。私どもの理念には、相互扶助という言葉が含まれています。クロポトキンは、無政府主義者で有名ですが、『相互扶助論』という本を書いています。私は、犯罪学の研究者で、例えば薬物を使ってしまった薬物依存の方々のダルクとかいったセルフヘルプのグループに興味があります。ダルクのような集まりは、自助グループ、セルフヘルプと言ったりしますが、実際には「ミューチュアルヘルプ=相互扶助・相互支援」で、自助ではなく共助のグループです。やっぱり人は一人では生きられない、助け合おうということです

最近、私の考え方の支えになっている概念が、南方熊楠、明治の大学者ですが、彼の萃点(すいてん)という概念です。これは、彼が描いた南方(みなかた)マンダラという、宇宙を表現している図です。マンダラのだ真ん中にイロハの「イ」があります。つまり、このど真ん中が萃点で、全ての人々が出会う出会いの場、交差点みたいなものだと思います。私は困りごとが「イ」の所だと思っています。困りごとを巡ってそこに人が寄ってきて、なんとかできるのではないかと思って、井戸端会議から始まるというイメージです。

萃点 (すいてん) とは【南方曼荼羅】



さまざまな因果系列、必然と偶然の交わりが一番多く通過する地点・・・そこから調べていくと、ものごとの筋道は分かりやすい。・・・そこですべての人々が出会う出会いの場、交差点みたいなもの・・・非常に異なるものがお互いにそこで交流することによって、あるいはぶつかることによって影響を与えあう場—それが萃点

(鶴見和子『南方熊楠・萃点の思想』藤原書店)

私たちの団体は就労支援のボランティア団体で、ボランティアをやってもいいよという人がいるところに、困りごと、つまりは相談者の方が入ってこられる。困りごとを巡って、相談者の方が地域の方に紹介をしていく。萃点を形成していくわけです。困りごとを巡って皆で情報共有をします。関わる人を絞り込んで困りごとに関わるチームを作ります。例えば先ほどの「たよりジョーズたよられジョーズ」ですと、だれだれさんが「ピアノを弾きたい」という困りごとが投げ込まれると「教えてもいいよ」「一緒にピアノを弾けるようになりたいよ」という人が集まってチームができる。こんなふうに、構造は全く一緒です。当然

のことながら、ある困りごとを持っている人が他のことでは助けられる、その人がまた他のことでは困っている、というような連鎖ができてきますので、こうしたしくみを作れば地域や大学は覆い尽くされていくと思います。萃点というのはそういう意味で、人が集まってきて、ごちゃ混ぜになって、そこから動きが始まり、化学反応が起きる場だと思っています。

グローバルな話に戻しますが、これはペストフという研究者が考えた「ペストフの三角形」(図1)と言いますが、社会をイメージしたものです。大きな三角形があります。その中に小さい三角形があります。それぞれ、国家・市場・家政です。一つの社会を、国家・市場・家政という三つの小さい三角形が支えているという図です。

それぞれの国家・市場・家政は異なる経済原理を表現しています。国家が再配分、市場が交換、家政が互酬性です。経済といってもお金のやり取りを意味しているとは限りません。経済とは必要な財やサービスを手に入れるためのしくみです。人は再配分を受けたり、交換し合ったり、互酬性の原理で財やサービスを手に入れて生き延びていくわけです。どうしても国家や市場や家政によって上手くカバーできないエリアが真ん中にあります。黒丸で書かれていますが、ペストフは、そこはアソシエーション、北欧で言えば協同組合が覆ってくれるというイメージをもっていました。北欧の子ども政策もアソシエーションが担っていると思います。

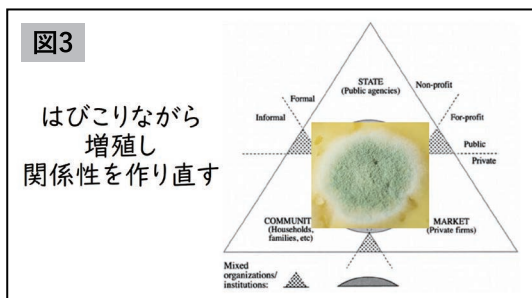
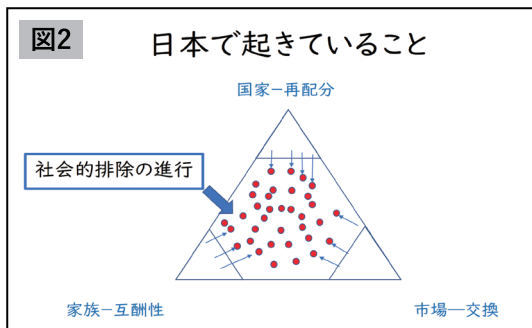
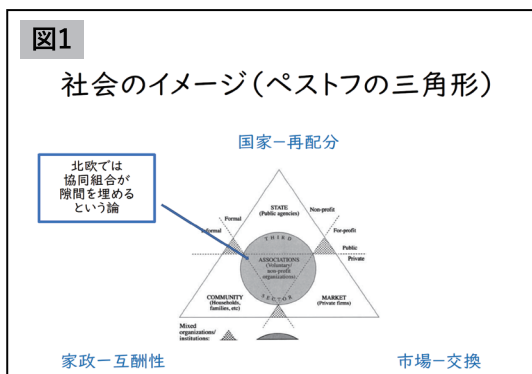
しかし、日本はもともと福祉国家ではありませんので、経済が悪くなってくると総崩れになってきます。図2のように真ん中は、アソシエーションによって覆ってもらえるわけではありません。日本にもNPOはあるのですが、それでは覆いきれず、真ん中はむしろ孤立化した方々、無縁化した方々が放り込まれていく場になっています。そこをもう一度、困りごとから始めて、自分たちのこの空白を自分たちで問題を解き合える場面として作り直していけるのではないかというのが、今、私が実際にやりながら思っていることです。

このことを考えている時に出合った言葉があります。一つは親鸞の言葉「いし・かわら・つぶてのごとくなるわれら」です。親鸞は宗教者ですから、こういう我らなんだけども、ある教えを信じることによってつながりながら救われるということでしょう。キリスト教の神父さんの本田哲郎先生も釜ヶ崎にいらっしゃいますが、「貧しく小さくされている人たちとおして神がはたらかれることを信じて、その人たちと連帯する」と言っています。本田先生は、単にお祈りをしている方ではなくて、労働運動と連帯して、釜ヶ崎の環境そのものを変えていく運動家・活動家です。こうした言葉には、そこに困りごとがあって、困りごとを抱えた人々がつながり合うことによって、社会が変わっていくというイメージが共有されていると思います。

最近思っていることは、私たちは一度社会から捨てられたと言うと大げさかもしれませんが、社会的な排除、要するに社会的弱者として一旦、真ん中に捨てられたものが、もう一回、「リ・オーガナイズ」(再組織化)することで生命力が宿るということです。図3の写真はカビですが、非常に力強い生命力でつながり合って、むしろ国家や市場や家政を、塗り替えていくことができるのではないかと考えています。「リ・オーガナイズ」という言葉を使いましたが、日本語では再組織化です。「編み直し」とも表現をしています。編み直しによって、就労支援の現場では何ができるのかと言いますと、いくつかの事例を書かせていただきました。

25歳の男性で発達障害をお持ちで、家庭的にも恵まれない方ですが、いろんな方がこの方と関わっていくわけです。その結果として、だんだん元気が出てきて、勉強もして、次へチャレンジしています。次の方も大変な方なんですけど、私たちが静岡で関わった方で、お家の納戸に入れられて育てられてしまった方です。この方にも本当にいろんな方が関わりながらやっと一人暮らしができていくという状況です。

私たちが大事だと思っているのは一人ひとりのストーリーに現われる登場人物を増やすこと。要するに、その人が萃点になっていくということです。たった一人で孤立するのではなく、そこにさまざまな人がいる出会いの場として「こんにちは」「なにかできることないかね」と言う場です。身近な私たちが互いに切り離されるのではなくて、自分たちのコミュニティを自分たちで動かして、自分たちのためにやれることをやっていくことをやっている。このようなことが私たちの団体で活発に行われています。他にも袋井市や掛川市、磐田市などにも活発な団体があり、地域の組織化は始まっています。これを別の言い方で



は「社会的包摂」と言ったりするのだと思います。

自立相談支援センターというのは生活困窮者自立支援の事業です。現在は別の団体が受託していますが、私たちが2回ほど受託しました。受託している間は、ここに困りごとが入ってきました。困りごとが入ってくると、それを市民の手に渡すことができます。出会いながら支援を仕掛けていくわけです。ど真ん中にある困りごとが私たちを活性化していきます。

同時に、社会の組織化ということに興味をもって、コミュニティ・オーガナイズの勉強をさせていただきました。沼津市では、コミュニティ・オーガナイズについての一般市民向けの研修を、県立大のお金も使って行っています。大学でも同じ授業をしています。今日参加いただいている芦澤さんもかつてその授業を受けてくださいました。

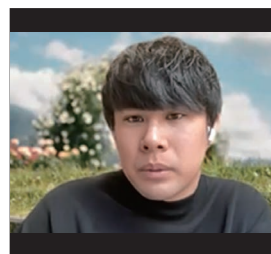
コミュニティ・オーガナイズは、特定の訴えごとがあって、それを実現する手法ですが、それだけでは十分ではなくて、社会経済的なしくみ全体をリ・オーガナイズする必要があると感じています。そこで、先行しているスペインや韓国の話を伺って、私たちの社会の未来像についても議論しています。

コロナ禍になり、沼津市の場合は、昨年3月に学校が休校となり、ひとり親の方が困ったので、ただちに配食サービスを行いました。これは現在も継続しています。まだできあがっていませんが、沼津市民シンクタンクというものを作ろうと、一旦解散し、また再度立ち上げていますが、やっぱり自分たちのまちを何とかしていくためには、市民が自分たちの力を結集できるまちづくりが必要だろうということで改めて動いています。

私自身が参照している動きは、ヨーロッパにおける動きが中心です。例えば、ネグリとハートです。ネグリはイタリアの運動家で、彼らが南欧の運動に刺激を受けながら提示しているのは、『帝国』に始まる一連の著作で、帝国とはグローバリゼーションで、それに対抗するのがマルチチュードです。マルチチュードは複数形ですが、私「たち」のことです。単一存在ではなく、さまざまな問題意識やさまざまな集団が、ばらけずに連帯して社会を変えていく主体であることを表現しています。欧州では、ミュニシパリズム、つまり、自治体主導の反グローバリゼーションの動きがありますが、この主体もまた、市民運動の連合体であるマルチチュードです。また、『ケア宣言』という本の第3章「ケアリングコミュニティ」にはこんなことが書かれています。「相互扶助・公的な空間・共有された資源・ローカルな民主主義」、私たちがやっているのは、こういったものをベースに協働でケアする地域をつくっていくということです。今日は、子どもということがテーマになっていますが、子どもはケアを必要とする対象であり、ケアに満ちたコミュニティを作っていく仲間でもあると思います。ですから、さまざまな相互扶助への子どもの参加を、一緒にやっていくことが大事だと思います。

最後に、ピョートル・クロボトキン著、大杉栄訳の『相互扶助論』、最近読み終わった本についての話です。なぜか大杉栄は無政府主義者で有名ですが、私の家の近くにお墓があることを最近偶然知りました。『相互扶助論』を読んでいただくと分かりますが、革命を起こすとか、国家を倒すとか、暴力的なものでは全くありません。最初は虫や鳥、動物がいかに助け合うかという話から始まって、人間はいかに助け合う動物かという話になって、この本の一番の落ちは、ヨーロッパの中世にその答えがあるというもので、中世の都市国家は、いかに相互扶助に満ちていたかということが主張されています。グローバリゼーションの話をしました。私自身もグローバリゼーションの単位が大きくなりすぎたと思っています。この本『FEARLESS CITIES』というのは、都市を単位に地域をつくり直そうという主張をまとめたもので、この本とクロボトキンの『相互扶助論』の本は非常に呼応していると思っています。今日は、村という話ですが、村より少し大きい町とか市という単位で、この相互扶助のしくみをさまざまな協同組合とともに作れるのではないかと思いますし、静岡でも行いたいと思っています。以上で終わらせていただきます。

▼芦澤：ありがとうございます。それでは荒牧さん、津富さんのご講演をいただいて、ここからは参加者からのご質問をお受けしたいと考えています。基本的にはチャットでお願いします。私自身も静岡の津富さんの現場に何度か伺っていますが、毎回思うのが、静岡の人たちは、皆がこのようなことを当たり前のように知っていて、当たり前のように実行しているところが、いつもすごいと思っています。沼津の皆さんが行っている読書会にも参加させていただきましたが、常に課題の最前線にしながら、その都度このようなことを学んでいかななくてはというところに混ぜていただき、ありがとうございます。皆さんの質問の前に私が津富さんに質問をしますが、津富さんの周りの人たちが、当たり前のように共通言語を作っていくのですが、連帯とかチーム感を作るのに意識されていることは何かありますか。



▼津富：たくさんあるのかもしれませんが、学生とやるのと社会でやるのとでは若干違うと思います。社会では、良い方に出会うことがすごく大事です。最初の萃点になる人と出会うことがすごく大事だと思います。私はたまたま大学の中にいるため、学生は普段から見ているので、相性を見ながら人と人をつなげやすいですが、地域の方の場合は私がそこまで見えていないこともあって、良い方と出会えるかどうかで、すごい差が出てくるように思います。しかし芦澤さんが当たり前のように言われましたが、皆が皆、当たり前のようにやっているというよりは、できる範囲でやれることをやって、皆が楽しければいいね、という

以上のものではありません。「ボランティアなのに、よくそんなことするね」と思う人もいるかもしれませんが、行う側は「別にそれほどのことは考えていないし」という感じだと思います。もちろん、続けていくためには工夫は必要で、楽しくしていくこととか、何のためにやっているかを大切にするとかは意識します。それを忘れるとだんだんタスクになっていくと思います。どうやったらモチベーションを保てるのかはいつも考えています。あとは、こまめにお互いの関係に手を入れることではないでしょうか。うちも「たよりジョーズたよられジョーズ」のリーダーは4年生の女の子が行っていますが、後輩の面倒をものすごくこまめに取り組んでくれています。それを後輩たちが学んでくれると続いていくと思います。会社とかではないので、「はいやってね」、「お願いね」とかで動くものではないと思います。

▼**芦澤**:お給料とかではない部分で人に動いてもらうことは、いかにモチベーションをマネジメントしていけるかだったり、どうしても子どもたちに関わる部分に対して注力してしまっていますが、本当はチーム内に関心が持てる人がいるということが、運営には重要だと思います。

▼**津富**:最近思っていることだが、子どもとのやり取りであろうが、友達同士であろうが全部コミュニケーションだと思っています。情報伝達ではなく、なんか一緒に喋っていると楽しいとか、絶えずコミュニケーションを保ち続けることが大事だと思います。飲み会でもバスケットボールでも構わず、絶えず触れ合っている感じです。

▼**芦澤**:学生たちが気軽にフットワーク軽くいろんなことを始めていく姿勢を、大人たちが見て学ぶ部分もありますし、最近、山梨で知り合った方ですが、何も売るのが無いけれど、キッチンカーを始めるという人もいました。そのくらい気軽な気持ちで始めてみるのもいいと思います。

酒井さんから、「ヤングケアラーという言葉についてどうお考えでしょうか?」というご質問がきていますが、荒牧さんいかがですか。

▼**荒牧**:これは難しい問題であることはそのとおりですし、酒井さんの見解に賛同する部分は確かにあります。山梨県が今、議員立法で作ろうとしている条例については、ヤングケアラーの対策を独自の章にして作ろうとしています。甲府市の男女共同参画の委員会でもこのことは問題になって、まず実態を調査するとともにその調査をもとに対策をすることになっているのが現状です。最初に言ったように、この酒井さんの最後に書いてあるヤングケアラーという負のレッテルを貼って、なくさなければならぬ方向性ということよりも、どのように支援するかということが重要です。津富先生が言われたように、行政施策とともに、市民のレベルでどのように相互扶助をするかということも重要だと感じています。

▼**芦澤**:次に高野さんからいただいたコメントです。「津富先生の伴走支援について、学生さん以外の一般地域住民の人が加わるようにするための周知方法やポイントを教えてください」という質問が来ています。いかがでしょうか。

▼**津富**:私自身がいくつかの活動に関わっていて、青少年就労支援ネットワーク静岡でお話したのは、地域の市民の方々中心の活動です。学生はほとんどいません。伴走支援の対象は基本的に、一般の20代から40代、場合によっては80代くらいですから、学生には厳しいところもあって基本的には地域の方が行っています。核になる人がいるというのは、最初は出会いの中で、いろんな方に関わっていただいて、その中でフレンドリーな人というか、一人でやらない、頼るのが上手とか、いろんな人を誘うのが上手とかいう人が必ずいらっしゃるので、自然にその人を中心に輪が広がっていきます。ただ、ある程度は意図的にしたいと思っているので、自分たちがどのように連帯したらいいのかということは、自分たちで意識するようになり、最近はこの連帯の仕方についての議論をすることが増えています。ただ連帯しようとか、ただ集まろうとかでは目的がはっきりせず、何のために集まっているのかという話になります。例えば、今、配食サービスをやるべきという状況であれば人は集まりますが、具体的なサービスだけをテコに集まっても続きません。スペインでは、例えば、家が無い人たちとか、フェミニストの人たちとか、LGBTQの人たちとか、あるいは医療費が払えないとか、いろんな運動体の人たちが集まって、スペインの市民運動を作っています。単に集まるだけではなく、共通の目的はなんなのということを私たちは議論しなければいけなくて、沼津なら沼津の単位で、沼津の行政に対して私たちが働きかける時に、共通のまちの未来図を考える必要があります。核になるのは最初の人なのですが、人ではなくコンセプトが核になるように進化中というところだと思います。

▼**芦澤**:次に安部さんからいただいているチャットですが、津富さんへ「学生の声を行政に届けることは行っていますか?」

▼**津富**:これは難しいのですが、やっと取り組めるようになってきたかなという感じです。大学内には既存のルートはありますが、これが機能せず、行政に伝えなければいけない事態になってきました。先ほど申し上げましたが、たべものカフェという活動をしていて、これについて大学の上の方が好意的でない感触があります。一方、携わっている学生は、これは大事なことなので、ないがしろにしてほしくない、持続可能なものにしてほしいと思っています。大学の中で言ってもしょうがないという感触です。県立大学は県が所管していますので、県会議員などのルートを使って、県に提言することが、さっきの「助けたいんじゃー」の目的の一つです。私がパイプになって、県議会議員さんで行っているプロジェクトがあるのですが、そこに学生さんにも入ってもらってやっています。あと、静岡学習支援の団体は、そもそも静岡市の受託事業として受託していて、行政と

やり取りしながら活動しています。ここは行政の期待にちゃんと応えようということを、私は学生に話しています。

▼**芦澤**:高野さんからです。「荒牧先生のお話の中で、子どもは未来的視点を重視されがち。今の子どもについてどのような大人との接点を作ると良いと思われませんか?」という質問です。

▼**荒牧**:基本的には子どもの問題は、子どもに聞くというのが一番です。子どもの現在の状況を掴むには、一般的なアンケートやヒアリングとかがありますが、子ども関係のNPO・NGOの活用も良いと思います。最終的に津富先生の話につながりますが、「子どもにやさしいまち・コミュニティ」づくりというのは、日本では条例を作るということが一つの特徴だと話しましたが、この条例を作るためにも、子ども参加・市民参加が重要ですし、決定的には子どもの問題は、市民が鍵を握っていると思います。

▼**芦澤**:確かに、子どもの権利を盛り込んだ条例をまずは作る。それを事業とか地域に落とし込んでいく時に、担当している行政の部署で、縦割りになっていることもあるかもしれませんね。いかに市民の人たちがそこに関わっていけるか、絵に描いた餅にしないために、どのように関わっていけるかが大事だと思います。

▼**荒牧**:制定の過程でも市民が関わる、子どもが関わるのが重要だと思います。

▼**芦澤**:そうですね、ありがとうございます。安部さんからの質問を最後にしたいと思います。「地域の人、特に元PTAを協力者にしたいのですが、なかなか集まりません。協力してくれるのは団塊世代。時間など余裕が無いのでしょうか?どのようにアプローチしたらよいでしょうか?アイデアはありますか?」というご質問です。

▼**津富**:状況がよく分かりません。安部さんにはご事情があるかもしれませんが、最初からだれだれを協力者にしたいなどと考えずに、協力してくれる人を探すということになると思います。うちの団体も20年ほどやっていて、地域とか時期によって偏りもありますが、何年もやっているうちにいろいろな人が関わってきてくれているなという印象です。そのスパンは10年以上かかることもありますので、あまり焦らないことが大事だと思います。特定のターゲットに関わってもらいたい時は、若干楽しそうだったり、その人たちにとって重要だったり、あるいは、それは大変だから何とかしなければと思ってもらえるようにきちんとお伝えすることは大事だと思います。その人たちが動く動機を用意するということです。協力の仕方をこちら側で決めてしまうと、それはできないということで、降りられてしまうことも多いと思うので、ひとまず「協力してもらえませんか?」と何も定めずにお願いをし、では何ができるかということは後で考えれば良いと思います。また協力していただける内容をいろいろと用意することも大事だと思います。

▼**芦澤**:荒牧さんはいかがでしょう。

▼**荒牧**:津富先生のことに付け加えると、例えば組織をつくって、川崎市では地域教育会議という組織がありまして、地域の人と学校が協力し合って、地域の人が代表になっている組織です。このような組織をつくるということも、一つの手段だと思います。これは津富先生が言ったことを前提としての話です。

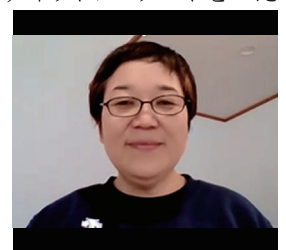
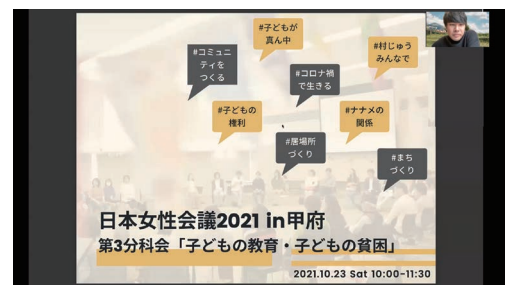
▼**芦澤**:ありがとうございました。今回の話の感想を身近な人に話してみて、議論するということに活かしていただければと思います。

【第2部】

▼**芦澤**:それでは時間になりましたので、第3分科会の第2部を始めさせていただきます。私は司会進行を務めさせていただきます、第3分科会運営メンバーの芦澤郁哉と申します。本日は14時までの90分間の分科会になりますので、皆さま、よろしく願いいたします。今回テーマにしたいキーワードを右上にいくつか並べています。このようなキーワードを扱いながら分科会を進めていきます。この後、第3分科会の趣旨説明と皆さんと一緒に考えたいことをお話しした後に、この第2部では実践発表を行います。若者たちは、なぜ一歩を踏み出したのかということで、地域で子どもたちに関わる活動を始めた若者たち3名に、それぞれお話をさせていただきます。その後、実践発表をしていただいた若者たちと、山梨学院大学の荒牧さん、静岡県立大学の津富さんを交えてクロストークを行います。参加者からのご質問は、クロストークの時にいくつか拾い上げていきますので、チャットにコメントをいただければと思います。本当は対面でお話ししたかったのですが、オンラインの中でも頑張らせていただきますので、よろしくお願いいたします。

次に、第3分科会の趣旨説明と本日皆さんと一緒に考えたいことを含め、第3分科会の運営メンバーであります副リーダーの福田さんよりお話しをさせていただきます。

▼**福田**:第3分科会の副リーダーをしています、福田奈里子と申します。本日はよろしくお願いいたします。



この第3分科会は、「It takes a village.～よそのボコうちのボコ おらが村をこせえるじゃん～」というタイトルです。「ぼこ」というのは甲州弁で子どもという意味ですが、よその子どもでも、うちの子どもとして一緒に育てていこうということです。「子どもひとり育てるのに村がひとつ必要だ」というアフリカのことわざをもとに、私たち第3分科会のメンバーで、子どもの教育・子どもの貧困をテーマにして、この女性会議の一つの分科会を担うことになりました。その時に子どもを取り巻く社会、コミュニティ全体をつくりたいという、皆の思いを集めてこの分科会の企画をしています。午前中は、荒牧先生に子どもを取り巻く現在の社会状況や子どもの権利条約から課題を捉えて、それを地域にどのように落とし込むか、しくみづくりをどうするかということをお話いただきました。また、津富先生には、子どもの困りごとは子どもに聞くことが一番大事であり、子どもたちを含めて活動することで地域社会が良くなっていくというお話や、子どもたちを含めた活動の中で、楽しみながらまちができていくという実践をお話いただきました。どのようなアプローチであっても、一つの村ができていく話を聞いて、すごく私たち自身が元気づけられました。この第2部は、第1部の話を受けて、実際に活動している若者たちの声を聞きたいと思います。それでは、よろしくお祈りします。

▼**芦澤:** それでは実践発表ということで、若者たちがなんでやろうと思ったのか、やり始めてどんなことを感じているのかということをお話しいただきたいと思います。それでは最初は山梨大学の清水そらさんから、実践発表をお願いいたします。

▼**清水:** 山梨大学3年の清水そらと申します。よろしくお祈りします。学生団体アラベスクという団体を立ち上げて、子どもたちの学習支援や、居場所づくりを山梨県南アルプス市で行っています。ここでは、子どもたちと一緒に勉強をしたり、カードゲームなどで遊んだり、子どもたちが帰る時に食料を渡すなどの活動を行っています。ここからは、この活動を始めたきっかけをお話しします。今回のお話の中で、皆さんに伝えたいことが2つあります。



1つ目は、選択肢を増やしてあげることが大事だということです。2つ目は、いろいろな関わり方があって、多様な人がいるおかげで、自分たちの活動が成り立っていることです。まず1つ目の選択肢を増やすということですが、簡単に言いますと、一つの活動に参加していると、一つの活動が大きくなるだけではなく、いろいろなところに学習支援だったり、居場所づくりだったりとか、子どもたちが育つ場所があったらいいねというお話をさせていただきます。

まずは、この活動を始めた一番のきっかけになりますが、中学3年の時に受験もあったため、夏休みにはもっと勉強したいとか、誰かに勉強を教えてもらいたいと考えながら家で勉強をしていました。どうしても分からないところがあったので、聞きに行こうと思い立ち、韮崎市で毎週日曜日に開かれている学習支援の場に行きました。しかし、その場所は家から自転車で30分以上と遠く、重いリュックを背負いながらの自転車では、なかなか簡単に通うことができませんでした。その時、近くにこのような場所があったらいいと感じていました。私は今後も教育に関わっていきたいと思っていましたので、非常に厳しい中ではありましたが、その学習支援の場所へ何度も通い、勉強をして今の大学に入りました。大学に入学してからは、子どもに関われる活動に参加しようと思いましたが、1年生のころは、なかなか最初の一步が踏み切れず、参加することなく過ごしていました。大学2年になって新型コロナウイルスが流行り、それでもっと困っている人が出てきたと聞いて、思っているだけでなくとにかくできることをやってみようと思い、子どもと一緒に公園で遊ぶイベントに初めて参加しました。自分に何か技術があるわけでもないのですが、このイベントに参加することによって「子どもと関わってくれる人がいる」ということに意味があるのではないかと感じました。自分にはもっとできることがあると気づき、その後、学習支援や子ども食堂、居場所づくりなどの活動に参加するようになりました。

このような活動を行っていたのですが、大学2年生の終わりに、自分の中で一つの課題を見つけました。自分の中学時代の経験とつながるのですが、そこには同じ子どもしか集まらず、その子たちしか助けられていないということです。もっと多くの子どもたちが私たちを必要としているかもしれない、もっと多くの子どもたちを助けられるのではないかと、ということに気づきました。そして、他にも新しい選択肢を作ってあげることに意味があると思ったので、今の団体を立ち上げました。現在、参加している子どもの中には、その選択肢(場所)が少なく、参加したくてもそこには行けなかったという子どももいて、私たちが始めたことが役立っていることを感じ、非常に嬉しく思っています。

このような形で活動を始めましたが、これは自分一人ではなにもできません。これは運営メンバーや、さまざまな協力や関わり方をしてくれる人たちがいるおかげで、このような活動ができています。これが2つ目の多様な関わりの中で活動が成り立つということにつながっています。自分一人では、困っている子どもたちを把握することもできず、場所もつくれず、支援する食料も集められません。そんな時、山梨県の教育系のイベントに参加した時、フードバンク山梨の理事長と出会い、自分の活動内容をお話ししたところ、場所や食料、資金などの協力を得ることができました。また、一緒に活動をする学生は、教育学部以外にもいて、学習支援だけでなく、その人のできる関わりをお願いして、活動を行っています。一人だけではできないということですが、最近の話ですが、あるフットサルリーグの運営団体の方から連絡があり、「スポーツと

の関わりを子どもたちに提供できないか」という話をいただきました。このように学習だけでなく、子どもたちと多様な関わりを作れているので、広がりを持った活動になっていると感じています。ここで活動の中で、非常に難しいと感じていることをいくつかお話しさせていただきます。

1つ目は、ボランティアの学生を集めることです。この活動は誰かにやらされるものでもないので、どうしたらもっといろいろな人が参加してくれて、関わってくれるかが、課題となっています。もう一つは継続性です。この場所がなくなってしまうと、子どもたちから場を奪うことになってしまうので、作ったからにはそれを続けていく必要があると強く感じています。その中で人を集めるということと関連して、これからは私たちより若い人が関わってくれるといいと思っていますので、より良い方法を考えているところです。

脈絡のない話でお聞き苦しかったと思いますが、今回の話で言いたかったことは2つで、一つは選択肢を作っていけたらいいということで、そこにいろいろな関わり方や、いろいろな場があるといいと思います。もう一つは、いろいろな関わり方のグラデーションがあるので、自分が直接関わらなくてもいろいろな方法があると思うので、ここに来ている人たちと一緒に、何かできたらいいと思いますし、絶対にできることがあると思いますので、これからいろいろなところで、一緒にできたらいいと思っています。以上です。

▼**芦澤:**ありがとうございます。次は山梨県立大学の加藤魁人さんにお話しいただきます。

▼**加藤:**私は実践発表者ではなく、実践失敗発表者だと思っていますので、よろしくお願ひします。山梨県立大学2年の加藤魁人です。何かやってみたいと思って、学生団体に仲間がいないかと探していたら、ある友達が活発で、その子と一緒に何かやりたいと思い、さまざまな会に参加していました。そんな時に静岡県立大学の津富先生の集中講義に参加させていただきました。そこにいる学生たちは温かく、自分たちがやっているという感じがすごくいいなと思いました。自分の県立大学にはそのような所が無く、寂しく感じたので、このような団体が一つあれば、変わるのではないかと思い、学生団体を立ち上げようと試みました。

結果として今のところは、自分がやりたいことには強い気持ちがありますが、周りの人にそれを説明する力がなくて、集まれなくなり、失敗に終わりました。今日は津富先生も聞いているので、自分が空中分解して失敗したことに関して、どうしたら成功したのかとか、津富先生だったらどのような言葉をかけてくれるのかとかを、ぜひお聞きしたいと思います。自分が立ち上げたかったのは、学生が自ら主体性を持ち、自分たちがやりたいことを「やりたい」と言える環境をつくり、大人たちの力も借りずに、一番最初の目標や課題設定も一から始めていく団体です。しかし、やはり大きなテーマや指針が無いからか上手くいかず、失敗してしまいました。何か意見をいただければ嬉しく思います。以上です。

▼**芦澤:**ありがとうございます。津富先生へのラブコールが届いたところですが、後ほどのクロストークでお願いしたいと思います。このような場所で、失敗した話をするには勇気がいることで、私たちは是非ここで学ばせていただきたいと思います。本人の希望もありますので、この後のクロストークで多く時間を使いたいと思います。最後は山梨英和大学の久保田優羽さんをお願いします。

▼**久保田:**私は山梨英和大学4年の久保田優羽と申します。よろしくお願ひします。私たちには、言葉があります。思いを伝えることができます。誰かを励ますことができます。つながることができます。まちづくりの始まりは、言葉からではないでしょうか。私は、そんな思いがあって、今ここでお話をしています。



高校2年生のクリスマス近く、我が家に1つの大きな段ボールが届きました。箱を開けてみると、お米やレトルト食品、お菓子、カップラーメンなどが隙間の見えないくらい入っていました。私は母子家庭で、4歳年下の妹がいます。その時は高校生だったので、アルバイトはできず、世帯の収入は母の収入のみでした。母は、家に届いたフードバンク山梨からのチラシを見て、私たちの知らない間に申し込んでいたようです。箱が届いた時、母は「サンタさんっているんだね」と、嬉しそうに言いました。そして何度も「本当に助かる」と言っていました。私は、母がどれだけ食の支援を必要としていたか、その時実感しました。お金の話を母がすることはなく、どれだけ余裕のない生活だったのか、恥ずかしながら私は知りませんでした。私が通っていた高校では、フードドライブという学校や施設で食べ物を集めて、フードバンク山梨に寄付をするという活動をしていました。寄付された食べ物は、必要としている家庭や施設に届けられます。私は生徒会役員だったので、学校に集められた食べ物を賞味期限ごとに仕分ける作業もしていました。家にあの段ボールが届くまで、「こんな活動があるんだな」くらいでした。しかし、各家庭が持ってきてくれ、私たちが仕分け作業をした食べ物が、どれだけ誰かの支えになっているのか、その時実感しました。そして、「私も誰かにとってそんな存在になれる」と思いました。でも、どうしたらそうなれるのか、ずっとそんな疑問がありました。

フードドライブの活動の重要性を知り、食の貧困が身近にあることを気づいてもらうためには、私から発信していく方法も

ありました。しかし、私は、支援を受けたことを誰にも言えず、高校を卒業してしまいました。奨学金を借りて大学に進学し、フードドライブの活動を行っているサークルに所属しました。

この写真は実際に大学でフードドライブをやっている様子で、右の写真のように毎日集計をして、写真を撮ってメンバーで共有することをしていました。2年生の時に私が主体となってフードドライブを行うことになり、どうしたら一人でも多くの人が食の貧困問題に気づいてくれるか、たくさん考えました。そこで、行き着いたのが、私自身の経験を言葉にして人に発信することでした。高校生の時に言えなかったことを大学生になって言おうと思ったのには、きっかけがありました。



サークルをとおして出会った仲間は、それぞれが問題意識を持っていて、部会をとおしてそれを発信していました。一人が発した言葉から、それを聞いた一人ひとりの意識が広がっていくのを、私自身がサークルをとおして実感していました。「だから私も」と思うようになりました。まず友人に話し、サークルの部会で30人ほどに話をしました。話したことがきっかけとなって、私と同じように食の支援を受けていたことを話してくれた人や、「大学生になってからフードドライブの存在を知って、間接的にでもちゃんと誰かの支えになっていたことを知った」と言ってくれる人もいました。また、大学で1限後の20分ほどの時間で行われているチャペルアワーという時間で、先生や参加している学生に話しました。チャペルアワーでは、聖書を読み、賛美をし、祈りをささげ、メッセージを聞きます。私は、静かに自分と向き合うことができる時間だと感じています。バクバクした心臓を抱えながら、ステージに登壇して、息を吸いました。ここには私の思いを言える空気があって、寄り添って聞いてくれる視線がありました。自分の思いを表現できた時、心がすっと軽くなるのを感じました。

その時から、私たちは、何かしらのモヤモヤや、重たいものを抱えているのではないかと。安心して自分を表現できた時、それらは少しだけ軽くなるのではないかと。そんな場所をつくりたい。自分の問題意識や違和感、もやもや、助け、なんでもいい。ここなら大丈夫。そんな場所を。言葉にすると、言葉が返ってきます。そこから、新しいものが生まれることもあります。それが、My C.というグループでした。「安心して話せる場所をつくりたい」「一緒にさまざまな社会問題について考えたい」「多様性について、ジェンダーについて、平和について、関心がある」そんな人たちが、言葉を伝えて集まり、「第1回山梨ユースリーダーシップフォーラム2021」という企画を開催しました。

私たちMy C.は、「言葉にすること、表現すること」「言いやすい、表現しやすい環境をつくること」を大事にしていました。「多様性を考えよう」をテーマとしたこのフォーラムでも、講演やワークショップの中で、一人ひとりが、自分の中から出てきた言葉を大事にし、相手のことを尊重しながら仲間と語り合うことをしました。今年の8月には、甲府YWCA主催の「ピースフェスタ2021」で山梨YMCAの子どもたち総勢70人くらいと、戦争について考えたり、「アドボカシーってなに?」というワークショップを行いました。ワークショップでも、一方的に「教える」という立場ではなく、一緒に考えたり、子どもたちが言葉にしやすい雰囲気づくりや、子どもたちの言葉をしっかり受け取る姿勢を心がけました。

「言葉にすることの意味」「受け取ってくれる人がいることの安心感」「助けを求められる環境があること」「自分らしく表現できること」そんなことを大事にしているMy C.だからこそ、できることがあると思っています。私は、何の専門家でもない、山梨県に住んでいる大学4年生です。フードバンク山梨から食の支援を受けたことをきっかけに、言葉にすることで言葉が返ってきて励まされたり、つながりができたりしました。そのつながりから、新たな問題意識や、視野を持つことができている。私たちは決して一人で生きているわけではなくて、誰かに支えられて生きていて、自分自身も誰かを支えることができる存在です。何かしたいけど何をしたらいいかわからない人は、何かしたいことを言葉にしてみたらいいかもしれません。今日はお話を聞いていただきましてありがとうございます。これで終わります。

▼**芦澤:** 皆さんいかがでしたでしょうか。3名の実践発表を聞いていただいて、改めて自分自身に矢印を向けていただいて、ここからは荒牧さんと津富さんに加わっていただき、クロストークを行いたいと思います。参加者からのご質問などもクロストークの中で扱っていきたいと思います。まずは3人の話を聞いて、荒牧さんと津富さんが、どのように聞いて、どんな感想を持たれたのかお話しいただきたいと思います。まず荒牧さんから。

▼**荒牧:** 感想ではありませんが、この甲府大会の基本方針の4番目に、「市民や学生が参加、参画する大会」に相応しい分科会の報告者だったと思います。3人の報告はそれぞれ意味があって、重要なことだと思います。私のほうから質問がありまして、清水さんが「アラベスク」と名づけたのはどうしてか、ということ。それから、加藤さんには失敗の原因は、現時点でどのように考えているか、ということ。久保田さんには、食の貧困に取り組んでいるということですが、もう少し、My C.の活動について聞きたいと思いました。

▼**芦澤:** 今、荒牧さんからの質問は、また後で3人にお話しいただきたいと思います。先に津富さんから3人のお話からどのよ

うに思われたか、お話しいただきたいと思います。

▼津富：自分がどうしてこれを行っているかは、すぐには分かりません。いまだに僕自身も、なんでこれを行っているか、分からないことがたくさんあります。その問いは大切にしてほしいと思います。今も何かあったら答えてくださればありがたいと思います。僕の今の仕事は静岡県立大学ですが、前は少年院の先生でした。なんで少年院の先生になったのか、と言われても分からなくて、その時の同僚の考え方もさまざまです。悪と対決したいとか、正義を実現したいという人がごく一部いますし、もともとご家庭に何かを抱えていて、そういう人たちに寄り添いたくて入って来られる方もいます。男子ばかりで、とてもダイナミックな所なので、そういう所でワサワサやりたいと思って、入っている方もいました。皆さんには、自分自身がなんでこれを頑張っているのかを、すごく考えてもらいたいとか、感じてもらいたいと思います。

僕自身も身近な学生を見ていて、さっき、たべものカフェの話と同時に学生ボランティアセンターの話をしました。例えば、リーダーの子は、取材とかに来られると全部断ってしまうような子なんです。写真に写るのも嫌だし、名前が出るのも嫌でした。最近も、名前が出るチラシを作ってくださいと頼んだら、嫌がられて困っています。でも活動はすごいです。その子自身はすばらしいリーダーで、周りの子にもすごい気を遣っていて。でもその子のモチベーションは何だろうって思います。だから、「自分はなんでやっているんだ」ということを解いてほしいということが一つです。

あとは、今、活動をうまくやれているわけですね。やれている人は、うまくやれている理由の分析もしてくれていましたが、なにか欠けたら、うまくできなくなってしまうかを考えてほしいと思っています。僕自身もたまたまできていることがあります。できなかったこともいっぱいあって、後でいっぱい反省します。そうやって考えていくと、1つ目の問いにつながっているところがあって、自分のモチベーションはどこか、なにを引いたらなくなってしまうかという話になります。それもいっぱい考えてもらいたいと思います。加藤さんからの質問でしたが、加藤さんは、むしろ、清水さんや久保田さんに質問するほうが正しいと思います。学生同士で助け合うのは、すごく大事なことで、人と一緒に何かしようという時にうまくいかない時は、なにかが足りないことが多いです。その足りないことに気づくと成長ができるので、やっている人たちに相談するのもいいし、場合によっては、すでに動いているところに混ぜてもらって、さまざまなことを体感してもらって、すごくいいと思います。

▼芦澤：ありがとうございます。それでは荒牧さんからいただいた質問もありますので、清水君からお願いします。

▼清水：ご質問ありがとうございます。「アラベスク」という団体の名前の由来ですが、アラベスクは日本語で「唐草模様」を意味しています。唐草模様は日本の伝統的な模様で、つながりとか繁栄とかの意味を持っています。僕たちも社会とつながったり、子どもや家庭も社会とつながって、このような活動が未来とつながったらいいと思い、この名前を付けました。唐草模様というのは、語感も良くないので、英語にして「アラベスク」にしました。



▼芦澤：団体名に、実現したい未来像の思いを託していくのもありますし、その団体がキーワードにしていること、例えば、子どもを中心に皆つながろうよ、みたいな言葉をキーワードにしている団体とかもあります。この言葉のもとに、考えが違う人たちも集まれるみたいなキーワードを持っていると、違った分野の人たちと手を組んでいけるのではないかと思います。次は加藤君に、今思う失敗の原因はなんだと思いますか。

▼加藤：まだ自分は知らないことが多いと思います。そこに参加してくれようとしていた、学生や仲間たちの考えとか、思いとか。他の今運営しているサークル・団体に比べ、自分はまだ場数が少なく、「これが必要だったんだ」という気づきがなかったと思います。「このようにしたい」と思う気持ちが強すぎたともあります。

▼荒牧：それが重要だと思います。そのように思えたことが重要な成果・効果だと思います。

▼芦澤：僕自身も学生時代、さまざまな活動に参加して、具体的に何かをやっている時よりも、仲間と一緒に食事している時や、準備や片付けの時に、雑談の中で学ぶことが多かったように思います。その人たちが意識していることとか、わざわざ言葉に出すまでもない行動とかに触れていくことが大事だったと思います。この3名は、今回初めて会ったと思いますが、それぞれの活動の相談などもできるようになったことは良かったと思います。次は久保田さん、食の支援から活動をなさっていますが、その活動内容をもう少し詳しく教えてください。

▼久保田：私は最初、自分が当事者であったことから、食の貧困問題に関心がありました。それを言葉にして言うようになったら、周りの人たちも、それぞれの問題意識を話してくれるようになり、そこからつながりができて、作ったのがMy C. というグループです。私も、自分が「食の貧困について関心がある」と言ったことで、違う人たちの問題意識を知って、自分の視野も広がるし、また新たに食の貧困と平和学習をつなげたら、新しいものができるのではないかと、そういうものを皆で生み出せるようにもなりました。



My C. の主な活動ですが、一番は先ほど紹介した、ユースリーダーシップフォーラムという企画です。それは主に多様性を考えようというテーマでやっています。性の多様性についての講演では、ジェンダー、文化、コミュニケーションなどの違いが皆あるのは当たり前なので、そこから自分はどのような違和感を持っているとか、モヤモヤがあるとかを、表現しようというワークショップを行いました。そのフォーラムも、夏に子どもたちと行ったワークショップも、ワークショップには必ず決まりごとがあります。皆、価値観や考え方が違うというのはあることだから、誰かが言ったりしたことを批判したり、周りに悪口を言うことは絶対にしないで、「この企画の中のスペースは安全です」ということを、約束ごととして決めています。あとMy C. のメンバーは私と一緒に、居場所づくりや、言葉にすることの大切さを重要だと思っているので、My C. のメンバー自体も居場所になるように活動をしています。例えば、メンバーが関心あることを、皆で共有をして一緒にその問題について考えるとか、意見交換するとか。今は平和学習を月に1回行うなど、メンバー同士で言葉を紡ぎ出すということをMy C. の活動でやっています。だから、内側での活動も行っているし、外へ向けての活動も両方していて、だからこそMy C. というのが、私たちの居場所になったり、また外に発信したことで、新たなつながりができたりすることが、My C. の活動だと思っています。

▼**芦澤:**詳しく教えていただきありがとうございます。私自身、My C. の活動というか、久保田さん自身のマイストーリーを聞かせていただく中で、自分の思いや意見を発する時には、受け入れてくれる場所があることが重要だと感じています。最初は発信することに不安があったと思いますが、発信した時に周りがちゃんと反応してくれ、そこからつながることができたという成功体験できたからこそ、このような活動につながっていると思います。コメントをいただいていますので、少し扱っていきたいと思います。

「子どもにとってのシェルターが家庭であるのが一番良いことだと思っていますが、1カ所では負担が大きいし、崩れた時にリスクがある。地域のあちこちに緩やかな居場所があれば良いと常々思っていますが、どのような居場所が求められ、ここはどう動いたらよろしいでしょうか?」といったご質問です。普段、子どもたちと関わっている中で、居場所ってひとことで言っても、いろいろな捉え方があると思いますが、清水君はどのように思いますか。

▼**清水:**居場所がどんな所か、僕もいまだに考えていることですが、「居ていい場所」が一つだと思います。ここに来ている人が、ここに居ていいんだなと思えるような場所であれば、どんなあり方でもいいと思います。そして選択肢がたくさんあれば、子どもたちが居たい場所に行けるようになると、今は考えています。

▼**芦澤:**いろんな人が集まれる場所をつくと、望む過ごし方が違う場合があります。同じ場を共有するのに、相容れない場面があったことはありますか。

▼**清水:**一つの場しかない、ここに合わないとなった場合は、居場所がなくなってしまうので、それぞれいろいろなあり方や場所があるのが一番だと思います。

▼**芦澤:**いろんな団体の活動を見ている加藤君は、居場所という言葉を知るとどんなことを大事にしていますか。

▼**加藤:**そこに参加する人が、その人らしくいられる場所であってほしいなと思います。皆にとって。ただ居場所は、結局誰かが居づらい場所になってしまって、誰にとっても居やすい場所というのは、理想論とか夢のような話ということを踏まえて、居場所づくりを考えていかないと、一人よがりになってしまうと思いました。

▼**芦澤:**確かに、皆の居場所というと、誰に届くのかということがあったりします。津富さんにお聞きしますが、皆の居場所は、どのあたりがポイントになるのでしょうか。

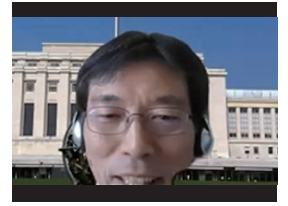
▼**津富:**今のお話の流れだと、難しい質問ですね。居場所にはさまざまな雰囲気があっていいと思います。いろいろあるほうが重要です。例えばショッピングセンターでも中のお店はいろいろあって、自分の好きな所へ行くわけです。居場所によっては、曜日によって居場所の内容を変えていたり、多様化をされているところもあるでしょう。居場所は自分自身が「これをやりたい」と思っている人がそれをやればいいし、不得意な雰囲気の居場所をつくる必要もない。だからあまり複雑に考えないで、気の合う人とやるということだと思います。その場所に誰でも来ていいよということだけではなくて、そこから外に向けて何か起きていくようなことがあれば楽しいと思います。単にそこに落ち着きにくるのではなくて、そこで喋っているうちに何かやろうという話が起きるように意図しておくのは大事だと思います。



もう一つ思っているのは、居場所では一人ひとりの安心・安全が保たれなくてはなりません。皆さんは家庭の事情や仕事が違うなど立場の違いはありますが、それを捨てることはできませんので、その中で居場所を成立させるには、そこに行くことで、脅かされないという約束ごとが必要だと思います。例えば、普段は仕事としてお金を取ってやっていることをその場所では無料にしなければならなくなると、その人にとっては納得がいかなくなるでしょう。ちゃんと線引きしないとイケません。あと久保田さんが言われていた、今自分がどんな気持ちでそこにいるのか、周りがどんな気持ちでいるのか、を言葉にして出すということを実践するといいい場所になると思います。

▼**芦澤**:加藤君の失敗の要素が、実は隣の2人の実践からヒントになる部分が多くあるように思います。荒牧さんはいかがでしょう。

▼**荒牧**:居場所と言ったら、安心・安全がキーワードになると思います。僕の知っている居場所では、一つの場所しか提供できないという物理的な要素があるので、片隅ではギターを弾いている、真ん中では学習をしている、またゲームや将棋などをしているなど、いろいろな人がさまざまなことをしているのだとしています。そこが重要だと思います。



今でこそ、居場所というものがどういうものかある程度分かりますが、川崎市で2000年に条例を作った時、川崎の子どもの権利条例では、わざわざ子どもの居場所を規定しています。子どもにはありのままの自分でいること、休息して自分を取り戻すこと、自由に遊び活動すること、安心して人間関係をつくり合うことができる場所。これを居場所と言って、この考え方を普及すると同時に居場所をつくっていくということを、わざわざ条文にしないといけなかった。でもこのことは今でも生きています。肝心なのは、居場所に集う人が、「この場所はこれでいいんだ」と思えるのが重要です。

▼**芦澤**:居場所をつくることは、一見いいことをやっていそうな雰囲気ですが、そこに集まっている人たちの居場所感は、少しずつ違っていて、居場所をつくる時に、メンバー内でコンセプトを深く話していくと、一人ひとりのあり方が分かって、このメンバーで作るものはこういうあり方ということができてくると思います。個人的には楽しくできるのは最初だけで、その後は、あり方について勇気を出して触れていくことが重要だと思っています。

酒井さんからコメントをいただいています。「大人のやっている活動にも学生さんが参加していただけるだけでとてもありがたいです。学生さんたちは、自分たちがまだまだ経験が浅くて一歩踏み出すのに躊躇する気持ちがあるかもしれませんが、大人は経験やお金があってもできないこともあります。子どもたちにとって大人は別の生き物に感じるのか、子どもたちとすぐに仲良くなれるのは、年齢に近い大学生や高校生だったりします。第1部で話題になった、相互扶助の話につながりますが、大人にしても学生にしても高齢者にしても子どもにしても、お互いにできることで活躍して、お互いに教え合う空間が作ってほしいいいコミュニティになっていけると思いますが、いかがでしょうか？」というのですが、清水君からいかがですか。

▼**清水**:大学2年生の時にさまざまな活動に参加して、その時は自分にはできないと思っていました。しかし今思うのは、大人の方々と僕たちができる活動は違うところがあって、そこにはそれぞれの関わり方があると思っています。僕たちももっと成長していきたいので、そういう意味でも、もっと大人たちとも関わりを持っていきたいと思っています。しかし、大人たちは自分たちの取り分を意識しすぎていると感じているので、そこは正直言うとやりにくいと思っています。誰のための活動かということをも、もう一度考えてもらって一緒に活動したいと思っています。

▼**久保田**:私も、大人だからやりやすいこと、学生だからやりやすいことはあると思っています。だからといってそれぞれ分かれるのではなく、お互いが得意とする分野を一緒にやっていけたらいいと思っています。この活動から、私も教えるだけでなく、子どもたちから学ぶことがいっぱいあり、一方通行ではなくお互いの学びがあります。これを居場所づくりや、地域活動などで大人とやっていけたらいいと思います。目指すところは一緒だと思いますので、良い社会にしたいとか、平和にしたいとか、多様な人たちが多様な考えを持って、一人ひとり視野が広がっていけば、良い活動ができるのではないかと思います。

▼**加藤**:結局、大人たちに決定権があると思っています。その中で自分がすること、やってみたいことというよりも、大人がどう納得してくれるかということに思いが強くなってしまいます。大人が主体で補助として学生というふうに、どうしても優先順位が大人になるので、そこは難しく感じています。

▼**芦澤**:津富さんはそう思いますか。県立大学の先生という立場で、学生たちが主体的に活動をする中で、どんな形で関わりをもっていますか。

▼**津富**:ここに学生が2名ほどいますので、あとでインタビューをしてみたいと思います。僕が加藤君の意見について思うのは、確かにそのような場合もありますが、学生が最初に大人の意図を悪いほうに飲み込んでしまう場合もあると思っています。僕が思う原理・原則は、どっちが先にスタートさせていても、その場自体は何のためにあるのかということを考えるということです。その目的が先にあると思うので、本来の目的に向かっているかということ意識してそれを背負うことでさまざまな意見も言えるようになると思います。そうしないと、何のためにやっているか分からなくなってしまいます。私もなるべく介入しないように心がけていますが、上手くいっていないところにアドバイスなどしていると、どうしても私の考えが強くなってしまふことがあり、そこは私の悩みです。それでは、ここに学生リーダーの経験者が2人いるので私に代わってお話をさせていただきます。大人と一緒にやるということはどう思いますか。

▼**学生(清水)**:こんにちは静岡県立大学国際関係学部4年の清水と申します。私が、学生団体やボランティアを先生と一緒にやっている時に、先生に支配されると感じたことはありません。先生はいつも厳しく意見をくださって、団体を良くしていくために反映されるのは、すごく難しいと思いつつ、皆と話し合っ、自分たちなりに消化して良い方向に進めていくように

やってきました。先生はいつも良きアドバイザーです。なぜそのように思えたかという、先生と学生が輪になって、核となる部分を共有して話し合った時に、一緒に同じ立場で物事を考えてくれていたからです。結果、上とか下とかなく、先生の意向に沿って動かなければと感じずに、やっていったのかなと思っています。

▼**学生(大谷)**: こんにちは、同じく静岡県大学4年の大谷と申します。私は大人の人に自分たちの意見を伝えることは、すぐく勇気がいることだったと感じています。経験がある方たちだからこそ言ってくださることもあります。それに対して自分たちがどうしたらいいかということが分からなかったりするので、その時は周りの学生と話し合っ、一人ではなく、皆で意見を言ってきました。それと先ほど清水さんが言っていた、同じ立場でというところに共感していて、先生は私たちのことを信頼してくれているからこそ、アドバイスをくださっていると感じています。私たちのことを応援してくださっているし、でも一番の目標は社会を変えるというところが伝わってきたので、大人の人と一緒にやることにも抵抗もなく行うことができました。

▼**芦澤**: ありがとうございます。突然お話をいただいて。とても参考になりました。最後に実践発表をいただいた3名に一言ずついただいて終わりにしたいと思います。

▼**清水**: 今日は貴重な時間をいただきありがとうございました。今回一番思ったことは、目的を共有すること、またそれを問い続けるということです。それを今後も糧にして、活動を続けられればと思います。チャットでコメントいただいた方もありがとうございます。今回コメントをいただいた人たちとも、これから一緒にやれることがあると思うので、ご連絡させていただきたいと思っています。

▼**加藤**: 自分としては失敗発表だったので、実際今朝までこの場所に来ることを迷っていました。しかし、ここに来たことが大きな一歩だと今は思っています。この2人にも出会い、これからいろいろ聞きたいと思えし、これから自分の中で考えていきたいと思っています。本日は良い機会を与えていただきありがとうございます。

▼**久保田**: 本日は午前中も貴重なお話をいただきありがとうございました。私も友達同士や部会で自分のことを話すことが始まりでしたが、私自身の経験を話したことにより、このような女性会議で、もっと多くの人に広くお話しすることができました。私は、人それぞれがいろんなことで当事者であると思っていて、皆がそれぞれ抱えているものを、少しずつでも安心して言葉にできる場所づくりを、これからもしていきたいと思っています。ご意見、ご質問をいただいた方も、本日はありがとうございました。

▼**芦澤**: 本日の話を聞いて私たちが言いたいのは、「若者たちのストーリーを聞いて、あなたには何が残っていますか?」ということです。今日話を聞いて、皆さんが自分たちのフィールド、お仲間、ご自身がなぜ子どものことに関心があるのか、なぜ放っておけないのか、ご自身のストーリーを語るころからつながっていただければと思います。

第3分科会: 子どもの教育・子どもの貧困

取組み方針 子どもが真ん中のまちづくりのために...

- 「カタリバ(語り場)」の創出
- 「応援団ネットワーク(人的資源)」の創出
- 「リンクワーカー」の創出
- 「プラットフォーム」の設置



カタリバの創出
静かに寄り添う 静かなカタリバ



応援団ネットワークの創出
DIY好きな大学生に群がるキッズたち



リンクワーカーの創出
人と人をつなぐ名人!

第3分科会: 子どもの教育・子どもの貧困

未来の目指す姿

多様なカタチの...

柔らかく
温かい
オープンな
子どもの居場所
があふれるまち
甲府



プラットフォームの創出
青空の下が ぼくらの居場所♪



プラットフォームの設置
地域の空き家をDIYした 子どもの居場所